

Title	三橋富治男著, 「オスマン=トルコ史論」
Sub Title	Essays on the Ottoman Empire (オスマントルコ史論), by Fujio Mihashi (三橋富治男)
Author	和田, 博徳(Wada, Hironori)
Publisher	三田史学会
Publication year	1968
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.4 (1968. 3) ,p.145(705)- 147(707)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19680300-0145">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19680300-0145</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 批評と紹介

三橋富治男著

### 「オスマン・トルコ史論」

吉川弘文館 昭和四十一年十二月刊 ユー  
ラシア文化史選書8 四三一頁 九八〇円

和田 博 徳

十四世紀から二十世紀まで六百年以上も永続し、アジア・ヨーロッパ・アフリカの三大陸に跨がる世界的帝国を建設したオスマン・トルコの重要性は万人の認めるところであるが、我が国でその歴史を研究する人は甚だ少ない。この理由は本書の「はしがき」冒頭に引用されたソルボンヌのポウル・メル教授の言に、「オスマン・トルコ史を研究するには、東洋・西洋の諸民族による各種各様の未刊資料を丹念に蒐集して解釈する必要があるので、研究者は同時にシノロジストであり、イスラミザンであり、ビザンティニストであり、かつまたオクシデンタリストでなければならぬ」と見える如く、斯学の優れた伝統を誇る西欧の学者にさへ容易でないオスマン・トルコ史の研究を我が国でおこなうのは極めて困難である為めであらう。

## 批評と紹介

本書の著者、千葉大学の三橋富治男教授は慶応義塾大学東洋史学科を卒業後、約四半世紀の長い間、このような困難を克服して研究を進めて来られた我が国におけるオスマン・トルコ史の開拓者である。三橋教授は既にオスマン・トルコ史に関する多数の研究論文を発表し、概説書も幾つか書いて居られるが、本書は永年にわたる同教授の研究成果を一般向にわかり易くまとめたものと言うことが出来よう。したがって、本書は従来の概説書とは異なり、書名の如く「史論」であって、「はしがき」によれば、「オスマン国家のなりたちや、その雄大な世界帝国を支える制度的な特質あるいはその持続面と可変面、制度的に過去と衝突する近代化の問題などをも掘下げて、この面での体系づけ」を意図されたもので、オスマン・トルコ史上の主要な諸問題を取扱った左の七篇の論稿によって構成されている。

- 第一 オスマン国家の成立過程
- 第二 世界史への登場
- 第三 制度化された人間開発
- 第四 オスマン・トルコの提督とコロンブスの地図
- 第五 帝国形成期の亜欧関係
- 第六 オスマン・レジームの動揺
- 第七 近代化への努力と苦衷

次にこの七篇の論稿の内容を極めて簡略に紹介して行くことにする。第一「オスマン国家の成立過程」は小アジアに定着した遊牧トルコ族の中からオスマン族が抬頭して、十四世紀に国家を形

成するに至った過程を諸資料に見える説話・伝承などを検討しながら追求している。第二「世界史への登場」はオスマン国家が世界的帝国へと発展する基盤になったスルターンⅡカリフ制を始めウレマー・デルヴィシュ(イスラーム神学Ⅱ法学者・修道士)、ウエズィラザム(帝国大宰相)、ベイレルベイ・サンジャクⅡベイ(武人封建領主)、ミレット制(非イスラーム民族自治体)などの諸支配機構について述べている。第三「制度化された人間開発」はオスマン帝国支配下のキリスト教徒から少年男児を選抜して宮廷官僚やイエニⅡチェリ軍団員に補充するデウシルメ制および、オスマンⅡトルコの征服戦争に最も活躍した軍隊であるイエニⅡチェリの制度について論じ、なおオスマン帝国の税制や財政などの諸問題にも言及している。第四「オスマンⅡトルコの提督とコロンブスの地図」は十六世紀にオスマンⅡトルコの提督ピリーⅡライスが著した海洋案内書「キターブⅡバブリエ」の歴史的価値および、彼がコロンブスの航海図に基づいて作成した現存最古のアメリカ地図について述べている。第五「帝国形成期の亜欧関係」は十六世紀頃までのオスマン帝国の対外関係を中央アジアのマワランⅡナフルとの学术交流、ヨーロッパのハプスブルク王朝との対立、イランのサファヴィ王朝との抗争、ロシアのクリム汗国やモスクワ大公国との交渉などに分けて考察している。第六「オスマンⅡレジムの動揺」は十七世紀以後、オスマン帝国の国運が次第に衰退して行く過程を論じ、この衰退からの回復を企図したセリム三世やマフムト二世の諸改革も十分な効果がなく、

下降の一途をたどるのみであった事情とその原因などを究明している。第七「近代化への努力と苦衷」は十九世紀の中頃以後、ヨーロッパ列強の圧迫に対抗するために行なわれたタンズィマートの革新運動やメシュルティエートの立憲運動とその挫折について述べ、二十世紀初めに起こった青年トルコ党の革命運動を経て、第一次大戦の敗北によりオスマン帝国がいに滅亡するまでの情勢を説いている。

以上の簡略な内容紹介によっても察せられる如く、本書はその七篇の論稿において、オスマンⅡトルコ史上の主要な諸問題を時代順に悉く採り上げて居り、専門家のみならず、一般の読者にもオスマンⅡトルコ史の全体像が十分把握し得るように工夫されている。したがって、本書はこれまで少数の学者の間のみ限られて来たオスマンⅡトルコ史の専門的知識を一般に普及させる最良の案内書であると言ってもよいであろう。ところで、本書を構成する七篇の論稿の内容はいずれも興味深いが、その中でも一般の多くの読者に最も関心が抱かれるのは、恐らく現代アジアの諸問題と密接な関連のある最後の第七「近代化への努力と苦衷」ではなからうか。例えばヨーロッパに直ぐ隣接して早くから西欧文明を輸入する機会の多かったオスマンⅡトルコが、何故ヨーロッパから最も遠い我が日本よりも近代化に遅れたのであろうかと言うような基本的問題に対する解答への手がかりなども読者はこの論稿に求められるかも知れない。またこの論稿は色々な意味でオスマン帝国と相似した同じアジアの老大国である大清帝国の「近代

化への努力と苦衷」を讀者に連想させるであろう。確かに清末の洋務運動や変法運動の経過には、この論稿に示されたオスマンⅡトルコのタンズイマートやメシユルティエートの経過と著しく類似するものがある。このことは既に早く変法運動の当事者であった有名な康有為が自ら認めたところで、彼は光緒二十四（一八九八）年の戊戌新政に当り、特に「突厥削弱記」と題するオスマンⅡトルコの衰退史を書いて、それが清末の中国史と類似する旨を指摘している。右の題名の突厥とはオスマンⅡトルコを指すのであるが、この外にも清末から民国初期にかけて、オスマンⅡトルコ史に言及した中国人の記述は可成り見出される。これは当時の中国人が自国の運命に類似するオスマン帝国衰退の史実を学び、それを鑑戒として復興を図ろうとしたためであろうが、今日の我々に對しても中国近代史を真に理解するには、オスマンⅡトルコ史をよく勉強して両者を比較考察する必要があることを示唆するものである。

右の例などによっても明らかのように、オスマンⅡトルコの歴史は最も遠く離れた極東の日本や中国の歴史にさへ重要な関係があるので、アジア史はもとより全世界の歴史を知るために必須の知識であると言わなければならないであろう。以上の如き意味から言っても、一般には容易に近付き難いオスマンⅡトルコ史の複雑な専門研究の成果を明快にわかりやすく説いた好著として、本書がオスマンⅡトルコ史に直接関心を有する人のみならず、広く江湖に読まれることを希望する次第である。なお本書の巻頭には

オスマンⅡトルコ史に関する重要資料について解説した「序章」があり、巻末にはオスマン王朝の系譜・年表・主要参考文献および索引などを附してあるが、これらも讀者に對する行き届いた親切な配慮として甚だ有益であつて、本書の価値を一層高めているように思われる。